

がはせん、此世にはあやまちおほく、財をうしなひ病をまうく、百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ、うれへを忘るといへど、ゑひたる人ぞ、過にしうさをも思ひ出でなくめる、後の世は人の智恵をうしなひ、善根をやく事火のごとくして、惡をましよろづの戒を破りて地獄に墜べし、酒を取て人にのませたる人、五百生が間、手なき者に生るとこそ、佛は説給ふなれ、かくうとましとおもふ物なれど、をのづからすてがたきおりもあるべし、月の夜、雪のあした、花のもとにても、心のどかに物語して盃出したる、よろづの興をそふるわざ也、つれぐなる日、思ひの外に友の入來て、とりおこなひたるも心なぐさむ、なれくしからぬあたりのみすのうちより、御くだ物みきなど、よきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし、冬せばき所にて火にて物いりなどして、へだてなきどちさしむかひて、おほくのみたる、いとおかしたびのかり屋、野山などにて、御さかな何なといひて、しばの上にてのみたるもおかしいたういたむ人のしめられて、すこしのみたるもいとよし、よき人のとりわきて、今ひとつうへすくなしなどのたまはせたるもうれし、近づかまほしき人の上戸にて、ひしくとなれぬる又うれし、さはいへど上戸はおかしくつみゆるさる、もの也、醉くたびれて、あさぬしたる所を、主のひきあけたるにまどひて、ほれたるかほながら、ほそきもとどりさし出し、物もきあへすいだきもち、ひきしろひてにぐる、かひどりすがたのうしろ手、毛おひたるほそきはぎのほどおかしくつきぐし。

〔薩藩舊記後集二十七〕呂宋船之儀ニ付略○中今日までは圓乗坊不罷歸候、無心元存候略○中次ニ毎度申儀ニ候へ共在京中御酒過候はぬやうに御分別專一候、諸篇失儀は御酒より出來候事、先證多事に候、殊更貴所事は、先年難成所を上洛候而以來、人々手ををくよし候處、自然酒ニ被取亂、不入事共於出界一言も被仰候者、前々之儀共うすぐ可罷成候間、能々可有慎事專一に候略○中